

『講解教行信証』

教行の巻
信(統)証の巻

星野元豊著

存在の根源から発起された問いのみが、その存在を貫ぬき、いのちを発遣招喚する。わが身の重さを内実としない問いは、思いの尖鋭化のはてに風化し、生の営みの副産物的問いは、時と状況の移ろいの中で、意識の表面の波紋となって拡散消滅する。それは、自身の根柢を見定めることなく、自虐的な思念の虚妄な饒舌に奉仕する。

氏の論著に対面する者は、そこに「真宗的にこの歴史的现实を生きるとはどういう生き方をするか」という鮮明な問題意識が貫流していることに気づくであろう。宗教が歴史的社会的な問題との対決を避け、現実とのかかわりを不透明にするとき、それは現状への平和な順応性を補助するものでしかなくなる。求道の生命的事態から遊離して、概念の解釈や訓詁注釈に終始する腑分け作業は、正確さを目指すほどにその事態の全体から遠のく、そしてこの過程の不可逆性ゆえに、それら概念の再構成によって、生命的事態を蘇生させることはできない。

『講解教行信証』は、この課題と自らの志願を自身の使命として荷負した、教えの原点への全心身の直参の書である。『教行信証』を本当に読むとはどういうことか、その主体はどこにどのよううに自覚的に確立されるのかについての論及は、『浄土の哲学』

のはしがきになされている。バルトの『ロマ書』講解によって示された学問的探求は、主情的な耽溺を自心の安任処とすることを許さない。愛贖の死を契機とする生命的要求は、主知的な把握をもって事足りるとはしない。

われわれは、知らず識らずのうちに、厳密に規格化された語彙が支配する、狭い閉ざされた世界でだけ成立し通用する過剰な技巧の習熟と、謙虚さと淳心を欠いた怠惰な馴化とへ自身を貶しめてゆく。また、主我的な関心の中で形成された予定概念でもってその現状を傍観し批判する位置にしか身を置かない。それらの弊を超越して、教えの原点に立ち還らんとする者は、この書との主体的な対決を自らに課すべきであろう。

本書は、これまでに「教行の巻」(昭52年10月)、「信の巻」(昭53年8月)、「信(統)証の巻」(昭54年11月)の三冊が出版されており、少しの弛緩もない強靱な思索は、むしろ巻が進むほどに豊かに自由に繰り広げられている。構成は、「本文」(坂東本)、「解釈」、「検討」からなっており、その簡潔明解な表現は、読者の思索の展開に大いに資するであろう。また、本書の性格上、その箇所て論じ尽くすことのできない問題、全体的な視野の中で論ずべき問題については、さらに「別巻」をもうけての論理的徹底的な究明が約されている。

なお最後に附言すれば、「信の巻」より『親鸞聖人真蹟集成』が引用書として附加され、それのもたらす豊かな世界が、著者の思索に大きな刺激をあたえている。
(A5版・平均四五〇頁・法蔵館・三、八〇〇〜四、五〇〇円)
(飯山 等)